

どういふ対策があるのか「人によるヒナへの給餌」

ここ3年、23区内のある緑地でのオオタカの繁殖を見守っている会員から今年のレポートが寄せられました。繁殖当初のパターンは例年通りということで、トラブルの状況をメインに記されていました。以下紹介します。

「6月28日、今年も無事3羽が巣立ちました。しかし翌29日午後、近所の住人の一人が大木の洞に鶏肉を置いたと聞きました。幼鳥2羽が下りてきてしまい、注意した人とトラブルになり警官の出動騒ぎになったようです。家でこの話を聞き現場に行ってみました。

1羽(1番目)は地面で親の持ってきた餌を食べており、もう1羽(2番目)は大木の洞で鶏肉を食べているようでした。巣立ちが遅かったもう1羽は樹上でした。雌親は餌を持ってきた後すぐ飛び去るのですが、この時は近くの木の上3m位の枝にとまって幼鳥を見守っていました。しかし夕方になって樹上にいた巣立ったばかりの3番目も地面に下りてしまい樹上に戻れず保護(?)され30日午後に戻されました。

雄親は6月22日を最後に姿を見せなくなり(他から来たオオタカ成鳥との戦いの後、カラスの群れから攻撃を受け、逃げたもののダメージを受けたようです)、雌親が1羽で餌を運んでいましたが、雛たちは餌不足になったと思われます。(雄親が帰らなくなってから、連日來ているカメラマンが餌が足りないから可哀そうだといろんな人たちに話しているのを耳にしました。それを聞いた複数の人が鶏肉を置いたり、営巣木下に投げて置いたりしたことがあったようです。)

その後7月12日朝2番目の幼鳥がうずくまって弱っているところを発見され、保護機関に運ばれる途中死んでしまったそうです。8月2日の早朝3番目の幼鳥が死んでいるのが見つかりました。その二日前に護岸に下りた後、枝に戻るのに力なく飛ぶ様子を見てこれは危ないなと思いましたが、残念ながらその通りになってしまいました。

雌親も7月末には餌を持ち帰ることなく姿を見せなくなり、幼鳥も親から狩りを教わることなく今回の事態を迎えました。1番目の幼鳥も狩の真似事はしていたようですが姿を消しました。」



羽を乾かすオオタカの雌親

猛禽類やカワセミなどの、生餌を食べ物とする鳥は、片親だけではなかなかヒナたちを育てきれないことは、これまでの調査などで知られています。今回も雌親だけで3羽のヒナは養いきれなかったようです。それは「自然の摂理」として受け止めるとして、問題は、それを取り巻いていた人の行動だったと考えられます。

この繁殖地には平日でも50人、休日には100人を超えるカメラマンやギャラリーが終日たむろしていて、オオタカの一挙一動に目を光らせ、レンズを向けています。このオオタカは“人慣れ”していて、少々のことでは動じません。水浴びやその後の羽干しなども、近距離でレンズが狙っていても平気です〔写真〕。オオタカは“マン・ウォッチング”をして対応していると考えられます。しかし、今回の「人によるヒナへの給餌」は問題が大きいと思います。ただ写真を撮ることを楽しみにしている多くのカメラマンにとっては、野ネコに“餌をやる”といった気持ちでとされます。

レポートを報告した会員や研究部も手をこまねいているわけではなく、緑地の管理センター、オオタカの保護問題を考えている団体などと相談していますが、今のところ良策がないのが実情です。

(ここまでお読みいただいた方はお考えや他の事例などお寄せください。)

〔研究部・川内〕